

長野県における盆花採りの衰退と野の花の生育地の消失

浦山佳恵・須賀 丈・畑中健一郎（長野県環境保全研究所）・連 美綺（国立環境研究所）

近代の長野県ではお盆前に野山でキキョウやオミナエシ等を採取する盆花採りが広く行われていた。しかし、戦後里山の自然環境が大きく変化し、近年キキョウは絶滅の危機に瀕している。長野県におけるキキョウ等野の花の生育地の消失が盆花採りに与えた影響を把握するため、県内7地域で1955～1965年の盆花利用とその後の変化に関する聞き取り調査と当時の盆棚の再現を行い、盆花採りの主な衰退要因と考えられた牛馬飼育と草地利用の減少、薪炭利用の減少、水田の圃場整備の進展について統計類を用いて検証した。その結果、長野県では1955年以降、農業と暮らしのあり方が大きく変化し、1960～1975年に野の花の生育地が急速に変化・消失し、ほとんどの地域で盆花採りが衰退したと推察された。

キーワード：盆行事、キキョウ、草地、盆棚

1. はじめに

盆行事は旧暦7月中旬に先祖の霊を迎え、祭り、送る行事である⁽¹⁾。近代の長野県において、先祖の霊は野山で盆花を採る盆花採りによって迎えられ、盆花を盆棚に供えることで祭られ、川に盆花を流す精霊送りによって送られると信じられていた⁽²⁾。盆棚には、周りを野生植物で飾ったもの、供物に野生植物を用いたものもあった。盆花にはキキョウとオミナエシが広く用いられていた⁽³⁾。盆花や盆棚に用いられた野生植物は先祖の霊の依り代であったと考えられている⁽⁴⁾⁽⁵⁾。しかし戦後、里山の自然環境は大きく変化し⁽⁶⁾、近年キキョウは絶滅の危機に瀕している⁽⁷⁾。

本研究では、長野県における野の花の生育地の消失が盆花採りに与えた影響を把握するため、1955～1965年（昭和30年代）の盆花利用とその後の変化に関する聞き取り調査と当時の盆棚の再現を行い、盆花採りの主な衰退要因と考えられた牛馬飼育と草地利用の減少、薪炭利用の減少、水田の圃場整備の進展について統計類を用いて検証し、長野県の盆花採りの衰退過程を考察する。

2. 研究方法

1955～1965年の盆花利用とその後の変化については、県内7事例地域（図1）で4～7名を対象に聞き取り調査を行った。調査期間は2015年7～8月で、調査対象者は計40名（平均年齢77歳）であった。その結果から、盆花採りに関する語りを類型化し、1955～1965年と2015年の盆花とその調達先、盆花採りが衰退した時期に関する情報を整理した。

統計類としては、1884（明治17）年以降の牛馬飼育農家数と牛馬数⁽⁸⁾⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾、1903（明治36）年以降の草地面積⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾、1924（大正13）年以降の薪炭生産量⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾、1966（昭和41）年以降の水田の圃場整備済面積と未整備面積⁽¹²⁾を用いた。

3. 1955～1965年の盆花利用とその後の変化

1955～1965年頃、調査対象者の多くは少年少女～青年で

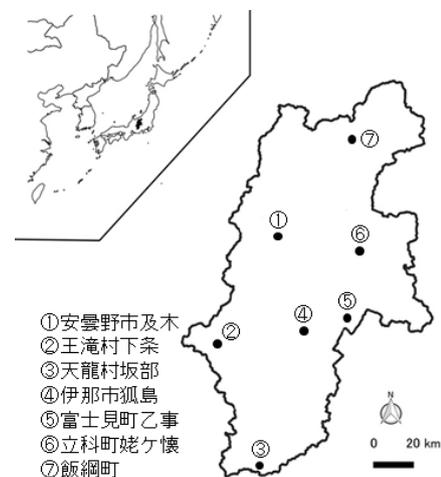


図1 調査対象地域

あった。盆花採りは子どもの仕事で、全地域で盆花採りに行ったという話が聞かれた（表1）。盆花は、キキョウ、オミナエシ、ナデシコ、ワレモコウ等で、キキョウとオミナエシは全地域で利用されていた（表2）。盆花の主な調達先は、田畑の畦・土手、採草地、薪炭林で（表2）、各地に野の花がたくさん自生する場所があった（表1）。田畑の畦・土手・採草地は株を採取する場所でもあり（表2）、畦では草刈りの際に盆花を残したり、お盆に花が咲くように芽を摘んだりしていた地域もあった（表1）。

表1 盆花採りに関する語りとその類型

類型	語り
盆花採りは子どもの仕事だった	・私は林のそばに畑がたくさんあったので、その林に盆花を採りに行った（安曇野市、TMさん、82歳）
	・私は河原に盆花を採りに行って、早く行かなければみんな採っちゃうって、「朝早く起きて行け」って親に言われた（安曇野市、TFさん、75歳）
	・（盆花採りは）子どもの仕事だったからね（安曇野市、FNさん、76歳）
	・（盆花は）山に強力をひいて行った帰りに採ってきた（王滝村、SSさん、81歳）
	・（盆花は）子どもや女衆が採りに行った（天龍村、STさん、78歳）
	・13日に子どもは山に行けば盆花を採りに行って、大人は莫産を作った（伊那市、BYSさん、73歳）
	・川を渡って山に行けば盆花を採ってきた。かすかに採ってきた記憶があるかな。木が生えていて（伊那市、BSKさん、72歳）
	・子ども会で盆花を採りに行った（富士見町、MSさん、87歳）
	・盆花は何しろ毎年採りに行った（富士見町、SYさん、83歳）
	・盆花採りは迎え盆の当日午後ぐらにやった。野山を飛んで歩いて、子どもの仕事だった（立科町、MHさん、71歳）
野の花がたくさん自生していた	・私は盆花を青木湖に採りに行くわけ。バスに乗って帰ってくる。お金をもらってサイダーを飲んでくる。妹が泣くわけ。それを振り払って上だけ行く。これを全部カヤで包むことが上手でね。上と下と全部カヤで包んで帰ってくるの。花が駄目にならないように頭を切ってね（立科町、NYさん、71歳）
	・お盆の13日は「朝も涼しいうちに盆花採りに行ってこいや」と言われた（飯綱町、WEさん、79歳）
	・林にはキキョウ、オミナエシやナデシコがいっぱいあってね。毎年出てくる（安曇野市、TMさん、82歳）
	・カリボシ山※にはオミナエシやマツムシソウはいくらでもいっぱいあったよ（王滝村、SSさん、81歳）
	・カリボシ山※にはキキョウとかオミナエシとかカリンドウとかそういうものがいっぱいあった（王滝村、TKIさん、71歳）
盆花を管理していた	・キキョウやオミナエシは田んぼの土手にも生えていた。採れる、採れる（伊那市、BSGさん、72歳）
	・オミナエシは多かったんだよなー（立科町、MHさん、71歳）
	・田の幅（畦）にキキョウやオミナエシなど花がいっぱい生えていた（飯綱町、WEさん、79歳）
	・キキョウはお盆に花が咲くように母親が芽を摘んでいた（飯綱町、MMさん、77歳）
	・お盆に花が咲くように、一番草を刈る頃親にキキョウの頭を摘んでおけと言われた（飯綱町、WEさん、79歳）
	・親達は草を刈る時もそれ（水田の畦の盆花）を残しておいた（飯綱町、WEさん、79歳）
	●水田の圃場整備で畦や土手の盆花がなくなった
	・1975年の構造改善で土手が三面張りになって盆花もクズもなくなった（安曇野市、KHさん、89歳）
	・及木の構造改善は1968年頃で真っ先だった（安曇野市、TKさん、82歳）
	・1960年に水田の土地改良をしてから盆花がなくなった（伊那市、BSIさん、72歳）
・1971年頃圃場整備をした際、畦を補強するために牧草の種を撒いたら花がなくなった（立科町、NKさん、73歳）	
野の花の生育地がなくなり盆花採りに行かなくなった	・昭和40年代の構造改善で盆花が咲いた畦がなくなった（飯綱町、OFさん、83歳）
	●牛馬の飼料のために草を刈らなくなり盆花がなくなった
	・1960年頃から牛馬を飼う人がどんどん減ってきて、農業が機械化して、草刈りを盛大にやらなくなると、木が大きくなって絶えてしまった（王滝村、TKさん、71歳）
	・牛馬や山羊は1965～1975年頃にはいなくなっていた。1975年には盆花はなくなっていた（天龍村、SYさん、84歳）
	・1965年頃になると牛がいなくなり花がなくなった（伊那市、BSIさん、72歳）
	・1961、1962年以降馬の飼育を辞めて、耕運機を用いるようになると、草刈りに行かなくなり、1965年には原の草花はほとんどなくなった（富士見町、MSさん、87歳）
	・草を刈らなくなると盆花は段々小さくなって絶えた。オミナエシも弱い花で、草に覆われると本当に小さくなってしまった（飯綱町、WEさん、79歳）
	●薪を利用しなくなると山が荒れ盆花がなくなった
	・1975年以降薪を利用しなくなった（伊那市、BYSさん、72歳）
	・山から花がなくなったのと囲炉裏で火を焚かなくなったのは同時進行だったと思う。1965年以降になると生活改善でガスが主流になってきた。かつては荒れている山はなかった（飯綱町、MMさん、77歳）
●刈払い機で草を刈るようになり盆花を残せなくなった	
・山の畑の周りを機械で草刈りをするようになると花が残せなくなった（立科町、NKさん、73歳）	
・構造改善で農業が機械化され、草刈りにも機械が用いられるようになってからは花を残せなくなった（飯綱町、MMさん、77歳）	
●シカの食害で盆花がなくなった	
・シカの食害で、山に花がなくなった（天龍村、SKさん、80歳）	
・2005年頃まではシカでそんなに騒がなかった（天龍村、MHさん、63歳）	
●農地開発で盆花を採った薪炭林がなくなった	
・林が構造改善で畑になった（安曇野市、TMさん、82歳）	

※冬用の株となる干草を採取する草地。

（聞き取りによる）

表2 事例地域の1955～1965年と2015年現在の盆花とその調達先

事例 地域	1955～1965年		2015年	
	盆花	調達先	盆花	調達先
①	キキョウ、オミナエシ、ナデシコ、ワレモコウ、ミソハギ、ススキ、ヒヤクニチソウ	水田の畦・土手、薪炭林、庭	リンドウ、サルスベリ	
②	キキョウ、オミナエシ、リンドウ、マツムシソウ、ヤマユリ、ナデシコ	採草地	キキョウ、オミナエシ、ミソハギ、ワレモコウ、ヤナギ、サルスベリ、ダリア、リンドウ、ヒマワリ	
③	キキョウ、オミナエシ、フシグロセンノウ、ミズヒキ、チョウセンギク、ミソハギ	田畑の畦、墓	—	
④	キキョウ、オミナエシ、ワレモコウ、ミソハギ、ヤマユリ	水田の畦、薪炭林、採草地、庭	アスター、エゾギク、グラジオラス、ユリ	庭、畑、スーパー、直売所、知人から
⑤	キキョウ、オミナエシ、ナデシコ、ヤマユリ、ハギ、ススキ	採草地	キキョウ、オミナエシ、キク、カーネーション、ハギ、ススキ	もらう、山、河原
⑥	キキョウ、オミナエシ、ナデシコ、ワレモコウ、フシグロセンノウ、ミソハギ、オニユリ	田畑の畦	アスター、ヒマワリ、グラジオラス	
⑦	キキョウ、オミナエシ、ナデシコ、コオニユリ、フジバカマ、フシグロセンノウ、ミソハギ	水田の畦、薪炭林、庭	キキョウ、オミナエシ、ミソハギ、ヒヤクニチソウ、アスター	

・番号は図1に対応する。太字は野山で採取されたもの、下線は株の採取地でもあった場所を示す。

(聞き取りによる)

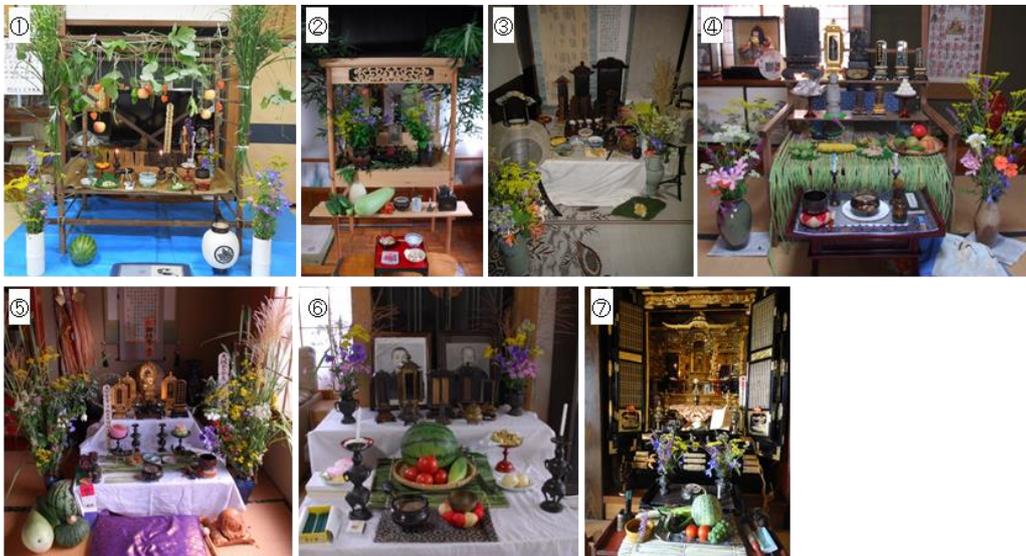


図2 事例地域で再現された盆棚 番号は図1に対応

盆棚は、飯綱町では仏壇前、それ以外の地域では仏壇と別に設置されていた(図2)。安曇野市の盆棚は左右にススキを立て上部にクズの蔓を渡した棚、王滝村の盆棚は周囲にヤナギを立てた棚であった。敷物や精霊馬の足等には様々な野生植物が用いられ、地域によって多様な盆棚が作られていた。送り盆には、盆花は敷物で包まれ川や用水路に流されたり、墓に並べられたりしていた。

盆花採りはほとんどの地域で1960～1975(昭和35～50)年に行われなくなった(図3)。盆花採りに行かなくなった理由として、全地域で野の花の生育地がなくなったことがあげられていた(表1)。野の花がなくなった要因としては、牛馬飼育と株の採取の減少、薪の利用の減少、水田の圃場整備の進展、草刈りの機械化等があげられた。

2015年現在の盆棚や仏壇には、栽培されたり、スーパーや直売所で購入されたりした花が盆花として供えられている(表2)。盆花には、キキョウやオミナエシの他、アスター、トルコキキョウ、リンドウ、グラジオラス、ヒマワリ等、様々な園芸植物が用いられている。

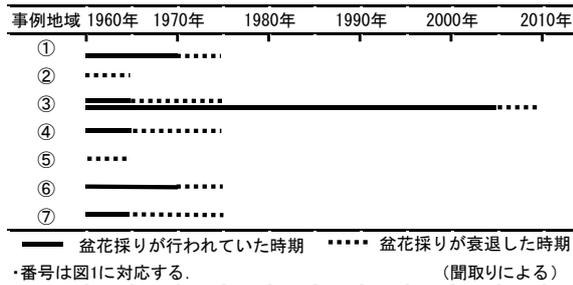


図3 事例地域で盆花採りが行われていた時期

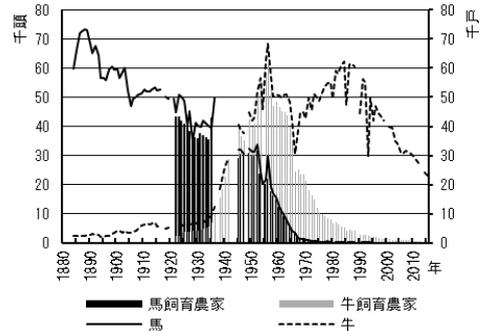


図4 1884年以降の長野県の牛馬飼育⁽⁸⁾⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾

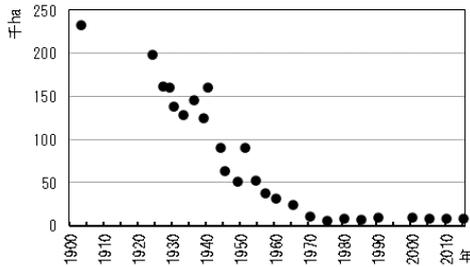


図5 1903年以降の長野県の草地面積⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾

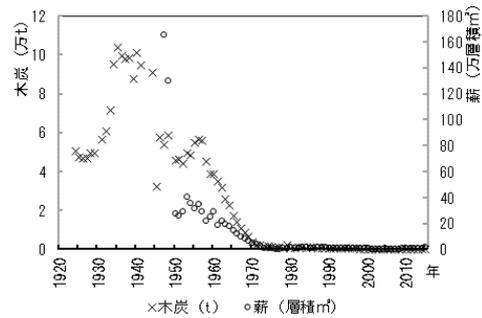


図6 1924年以降の長野県の薪炭生産量⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾

4. 盆花採りの衰退過程

明治初期の長野県の農業は主な肥料を刈敷や厩肥に依存していた⁽¹³⁾。刈敷は広葉樹の若枝や草、厩肥は牛馬の糞尿と草を混ぜ合わせ腐熟させたものである。そのため、草地からは肥料となる草や秣が大量に採取されていた。しかし明治中期以降は緑肥や金肥、戦後は化学肥料が普及すると、採草量は年々減少した(図5)。

高冷地の長野県では、発酵性の厩肥が重要で馬が多く飼育されていた⁽¹¹⁾。牛馬は耕起・代掻き・運搬にも利用されており、1935(昭和10)年以降馬が微発され役畜が不足すると馬より少ない飼料で飼育できる朝鮮牛が導入された。1956(昭和31)年以降ガーデントラクターや自動耕運機が普及すると役畜は減少し、肉用牛の多頭飼育が始まった(図4)。牛の飼育目的の変化は、飼料を野草から濃厚飼料や牧草へと変化させたと考えられる。

また戦前は主な燃料として薪炭が利用されていたが、戦後は石炭、1960(昭和35)年以降石油やガスが普及し⁽¹⁴⁾、炊事や暖房に用いられていたカマドやイロリはガスコンロや石油ストーブへと変化した⁽¹⁵⁾。その結果、1960年以降薪炭利用は著しく減少し(図6)、それは薪炭林の林相を見通しの良いものから階層構造が発達したものへと変化させた⁽¹⁴⁾。

圃場整備は、農業の機械化による生産性向上を目指した1961(昭和36)年の農業基本法制定以降、公共事業によって急速に進められた⁽¹⁶⁾。水田の圃場整備は、表土の取り去りと大規模な畦畔の改修が行われることから生物の生息環境に大きな影響を与えたと考えられている⁽¹⁷⁾。圃場整備は1990(平成2)年にかけて進められたことから(図7)、1960~1975年の畦や土手の野の花の消失には、聞取りで聞かれたように草刈りの機械化により花が残せなくなったことも関連していたと考えられる。

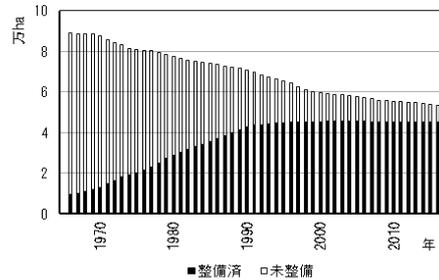


図7 1966年以降の長野県の水田の圃場整備済面積と未整備面積⁽¹²⁾

以上から、長野県の盆花採りの衰退過程は以下のように推測された。1955年頃の長野県では役畜として多くの牛馬が飼育され、炊事や暖房用の燃料として薪炭が利用されていた。明治以降草地利用は減少し、戦後は薪炭利用も減少していたが、当時集落周辺には秣のための採草地や明るい林が残っていた。間もなく、石油やガスの利用が始まり農業の機械化が進むと牛馬の飼育目的が役畜から肉用へと変化した。1960年以降はさらに薪炭利用が減少し、1975年までに草や薪炭利用はほとんど行われなくなった。また1960年以降水田の畦や土手では大規模な圃場整備や草刈りの機械化が進められた。その結果、1960～1975年に野の花が生育した草地や明るい林は急速に失われ、ほとんどの地域で盆花採りが行われなくなった。

5. おわりに

本研究により、長野県におけるキキョウやオミナエシの生育地は、1955年以降農業と人の暮らしが大きく変化し、1960～1975年の間に急速に消失したことが推察された。かつての長野県の盆行事は先祖と親しく交流する機会であり、野の花は先祖の霊の依り代として重要な役割を果たしていた。このことは、野の花の生育地の消失は単に盆棚に飾る花がなくなったことにとどまらない影響を人々に与えたことを示唆している。

引用文献

- (1)長沢利明「盆」福田アジオ他編『精選日本民俗辞典』吉川弘文館 2006年 483-484頁
- (2)長野県編『長野県史 民俗編 第五巻 総説II さまざまな暮らし』
- (3)浦山佳恵・畑中健一郎「長野県の伝統行事における野生生物の利用」長野県環境保全研究所研究報告 12号 (2016年) 35-43頁
- (4)喜多村理子「盆と節供」赤田光男・福田アジオ編『講座日本民俗学 6 時間の民俗』雄山閣 1998年 170-184頁
- (5)湯浅浩史『植物でしたしむ、日本の年中行事』朝日新聞出版 2015年
- (6)須賀 丈「日本列島の半自然草原 ひとが維持した氷期の遺産」須賀 丈・岡本 透・牛丸敦史『草地と日本人 日本列島草原 1万年の旅』築地書館 2012年 1～98頁
- (7)長野県『長野県版レッドリスト (維管束植物編) 2002』2002年
- (8)農林水産省『農商務省統計表 第1次～40次』1886～1925年
- (9)農林水産省『農林省統計表 第1次～53次』1926～1978年
- (10)農林水産省『農林水産省統計表 第54次～92次』1979～2018年
- (11)市川健夫『高冷地の地理学』令文社 1961年
- (12)長野県農政部『土地改良長期計画 進行管理 年度別整備状況推移表』
- (13)中堀謙二「肥料が変えた里山景観」信州大学農学部森林科学研究会編『森林サイエンス』川辺書林 2003年 37-58頁
- (14)中堀謙二「変貌する里山」安田喜憲・菅原 聡『講座 文明と環境 9 森と文明』朝倉書店 1996年 210-222頁
- (15)長野県農村文化協会編『暮らしが変わる 人が変わる』信濃毎日新聞社 1996年
- (16)山崎不二夫『水田ものがたり』農山漁村文化協会 1996年
- (17)牛丸敦史「畦の上の草原 里草地」須賀 丈・岡本 透・牛丸敦史『草地と日本人 日本列島草原 1万年の旅』築地書館 2012年 161-214頁